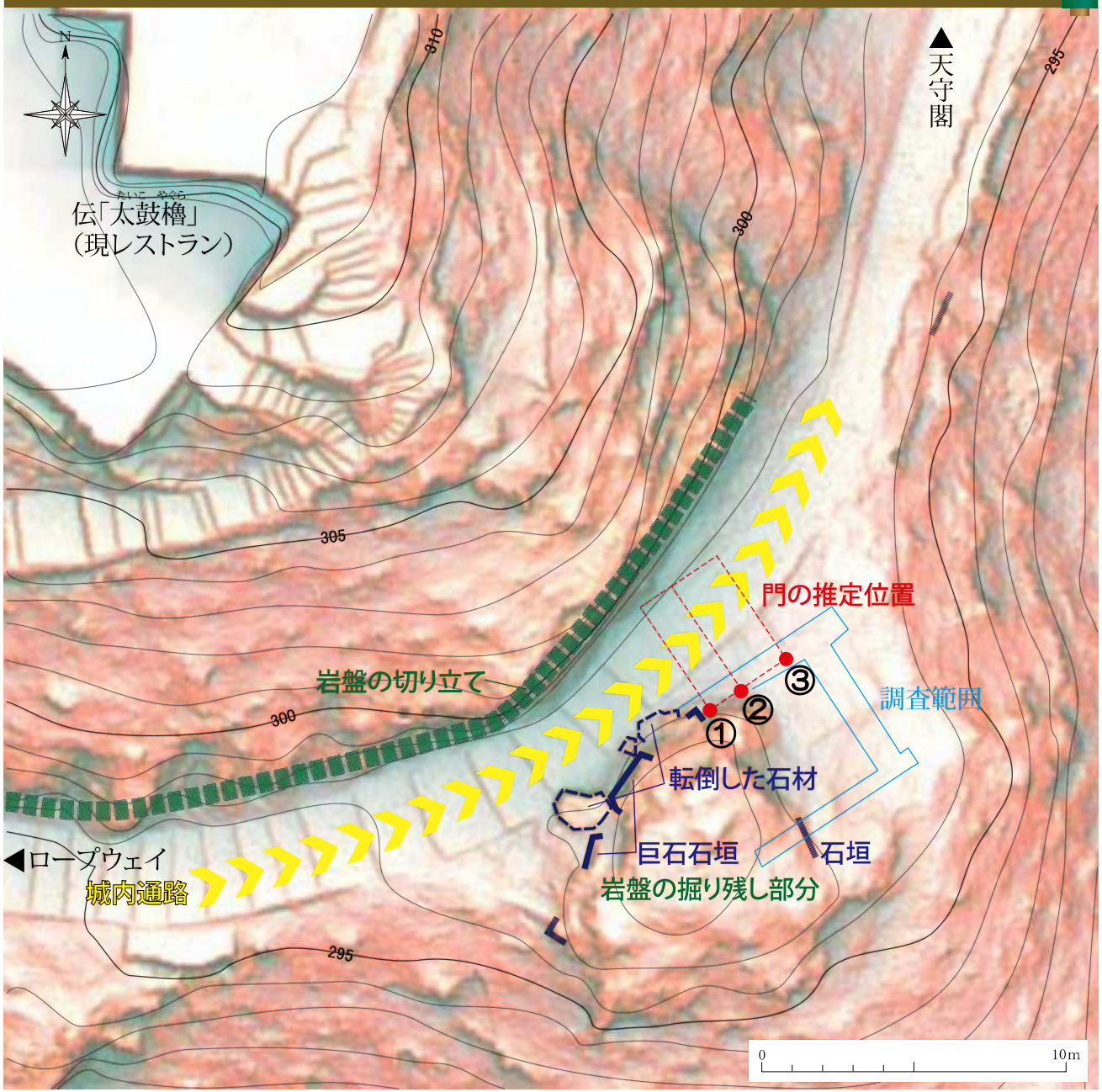
岐阜城「一ノ門」跡の発掘調査

令和３年２月



巨石石垣の最東端の角柱状の石材と岩盤の抉り込み。
この周辺は被熱して石が赤くなっています。

全体的に岩盤が平らに削られてますが、さらに念入りに平坦に加工した部分が見られます。

岩盤を方形に浅く削り込んだ部分があります。

①②③は一直線に並んでおり、門の柱を据えた痕跡の可能性があります。

岐阜城「一ノ門」の構造

ロープウェイ山頂駅から天守閣に向かって歩いてすぐ、「一ノ門」の跡を目にします。岐阜城の正門といってよい場所で、ここから岐阜城城内に入ることになります。

現在の「一ノ門」跡には巨大な石が並んでいますが、当時は一体、どのような姿だったのでしょうか？

元々、この部分には左から右へ延びる尾根がありました。この尾根の岩盤を掘り抜いて通路を造っているのです。右側には、掘り残した岩盤が高まりとして残っています。

岩盤はチャートで、非常に硬いのですが、脆いという特徴があります。

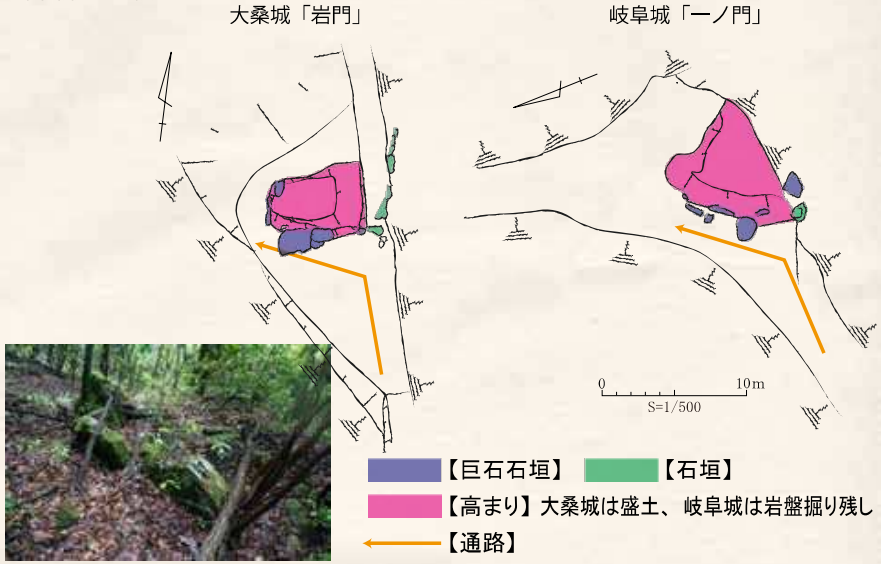
掘り残した岩盤の高まりの前には、巨石石垣が造られました。巨石石垣は板状の巨石を立て並べたもので、南西端は通常の石垣のコーナーに接続しているのが特徴です。巨石石垣は門の脇に造られ、入城者に対して権威を誇示するものと考えられます。

大桑城との類似性

岐阜城「一ノ門」は、向かって右側に巨石石垣があり、手前の端は通常の石垣のコーナーに接続し、奥の端に角柱状の石が立てられています。巨石石垣と石垣に囲まれた部分は、岩盤を掘り残した高まりがあり、通路はこれらを右に見ながら、左の方へ曲がっていくという構造になっています。

この構造と瓜二つの城門があります。岐阜市の北隣の山県市にある大桑城の「岩門」です。大桑城「岩門」でも今年度に発掘調査が行われ、非常によく似た構造であることが明らかとなりました。

平面形の比較



▲大桑城「岩門」調査前

大桑城は、美濃国守護土岐氏の最後の居城で、天文４年（１５３５）に枝広館（岐阜市長良）から移転、天文１２年（１５４３）の斎藤道三との戦いで落城します。

その頃の岐阜城は斎藤道三が本拠地としており「稲葉山城」と呼ばれていました。斎藤道三は、守護土岐氏の大桑城城門を見て、権威の象徴ともいえる巨石石垣の城門を、稲葉山城に築いた可能性が高いと思われます。